

NIH での研究生活

National Heart
Lung and Blood Institute, NIH

厚井 悠太

(東京大学定量生命科学研究所幹細胞創薬社会連携部門)

2019年9月より National Institutes of Health (NIH), National Heart, Lung, and Blood Institute (NHLBI) の Mukoyama 研究室でポスドクとして研究をしています。アメリカでの3年以上の研究生活を通して感じたことをこの機会に紹介させていただきたいと思っています。

私が所属している NIH は 27 の研究所で構成されているアメリカ政府の研究機関です。政府の研究機関ということもあり、大学の研究室とは少し異なり、研究資金が潤沢で、安定して研究をすることができます。この点は思い切り研究がしたいと思っている日本人のポスドクにとっては良いことなのかもしれません。アメリカ政府の研究機関とはいえ、アメリカ人以外の研究者も大変多く勤務しており、多様性に富んだ研究所であると言えるのではないかと思います。また、研究者同士もフランクにコミュニケーションが取れる環境で、アメリカ国外から来た私にとっても馴染みやすい環境でした。

巨大な研究機関であるメリットとして、各分野の第一人者とのコラボレーションがしやすいという利点があります。現在はオンライン化が進んでいるため、オンラインでディスカッションをすることも可能ですが、専門家と実際に会ってディスカッションをして、実際に共同研究ができるのはとても有意義なことです。また、NIH 内では毎日多数のセミナーが開催されており、一流の研究者の話を聞くことができます。このように、NIH で研究することは非常に恵まれているなと日々感じています。

Mukoyama 研究室は NHLBI に所属する研究室で、血管や神経の発生、病態のメカニズムを研究しています。本研究室にて私は、神経の機能が発生過程でどのように変化していくのか、神経疾患において神経の機能がどのように変化していくのかを研究しています。Mukoyama 研究室にはアメリカ国内のみならず、アジアやヨーロッパからのポスドクも多く所属しており、さらにはポスドクそれぞれのバックグラウンドも様々です。そのため、毎週のラボミーティングでは議論が白熱し、様々な角度から自分や仲間の研究を見つめ直すことができます。これは日本にいた頃は経験できなかったことで、研究を進めるにあたってとても役立っています。

このような恵まれた環境ではありますが、渡米してまもなく COVID-19 の影響で約4ヶ月間は全く研究室に行けず、完全に研究ができなくなっていました。その後も週の半分

は在宅勤務といった状態がしばらく続きました。時間が限られる中、工夫して実験をするのもいい経験だったと思います。

2022年3月から2023年2月までは上原記念生命科学財団のポスドクトラルフェローシップのサポートをいただき、アメリカでの研究生生活を充実したものにすることができました。今後も数年はNIHで研究を続けていく予定です。フェローシップのサポートによって得られた経験と知識を糧に、今後の研究を発展させていきたいと考えています。